教育広報 南会

編集・発行　福島県教育庁南会津教育事務所
発行責任者　平　山　明　裕
編集協力　市町村教委連絡協議会南会津支会
南会津郡小中学校長協議会

『三摩之位』

南会津教育事務所長

平山　明裕

この言葉は、「さんまのくらい」と読みます。柳生新陰流の第三世宗家・柳生兵庫助利厳が著した口伝書「始終不捨書」に掲載されているもので、剣を学ぶときに大切にすべきこと、つまり学習論を伝えています。

摩の字を磨とする場合もあるようですが、どちらも「みがく」という意味合いがあります。磨かなければならない三つは何かというと、「習い・稽古・工夫」です。

「習い」とは、先達の教えを真摯な姿勢で習い、学ぶことです。

「稽古」とは、その教えに近づくために、稽古を重ね鍛えていくことです。

「工夫」とは、教えを自分のものにするために、創意工夫していくことです。

これら三つのプロセスを一つの円の上に置き、そこをぐるぐる回っていくことが重要であると柳生では伝えています。利厳が没するのは江戸初期ですから、今から400年ほど前の言葉になりますが、剣の道だけではなく、人が成長するときにもつながることだと感じます。進学したり、就職したり、昇任したりなど、新たなステージに立った時のことを想像すると、ぴたりとはまる言葉です。

このプロセスの中で大事になってくるのは、最後の「工夫」であると、現代の宗家（第二十二世）は伝えています。自分のものにするための「工夫」は言い換えれば「気づき」です。「稽古」を何度も繰り返しているのに、なぜ「習い」に近づかないのだろう？何が足りないのだろう？と試行錯誤しながら創意工夫していくと、いつのまにか「習い」が会得できるようになってきます。すると、次のステージへ進み、また新しい「習い」に出会っていくのです。

この3つのプロセスは、真上から見ると円のようですが、横から見るとそれは螺旋階段のように、ぐるぐる回りながら上昇していく、そしてできればその螺旋の径がどんどん大きくなるといいのかな、と私は捉えます。

2年目を迎える南会津での勤務です。昨年より大きな円を描けるよう「工夫」していきたいと思います。そして、やがて自分が関わる子どもたちに大きな螺旋を描かせたいと思います。

『足跡を残すとは』

郡小中学校長協議会長

室井　正之

田島中学校の卒業生に、星　幸広さん（旧田島町水無出身）という方がいます。ご存命であれば今年80歳ですが、3年前に他界されました。

私は直接の面識はありません。でも管理職になってから苦しい時や判断に悩む時に、何度も幸広さん執筆の書籍を読んで、勇気をもらってきました。その意味で幸広先生の訃報はとても残念でした。

幸広先生は地元高校卒業後、千葉県警察官として奉職、警察庁警備局（首相警護責任者）や警察署長などを歴任、退官後に千葉大学大学院講師となり「学校危機管理」について研究をするようになります。豊かな経験、明確な根拠、歯に衣着せぬ論調は（と言っても、私は文章で学んだだけですが）、学校現場に大きな影響を与えました。郡内でも10数年前に教育事務所主催の学校事故防止対策研究協議会や郡校長会で講演を行い、多くの教職員が学びました。そんな時期に、私も先生の書籍に出逢ったのでした。

そのご指摘・お言葉は、学校経営を司る者にとって、とても示唆に富み、刺激となります。

私が常に心に止めている一節を紹介します。

①校長として、「責任はすべて私がとる。思う存分やってくれ」と言った方がよい。言っても言わなくても、何か発生すれば、その責任は校長にあるのだ。どうせならかっこよく。②リーダーは、相手が強いかどうかではなく、正しいか否かで判断する。③「教育的配慮」などといっているが、むずかしい判断から逃げていないか。などなどです。

最後に先生は「お世話になった教育界に足跡を残そう。」とも述べます。先生は警察界と教育界の両方に足跡を残しました。私は、自身の足跡を残すなんておこがましいことではあるが、せめて退職するその日まで精一杯、努力することが大切、それが「少しでも足跡を残すことであり、職業人として育ててくれた教育界への恩返しだ」と考えるようになりました。